

11. 災害経験を風化させずに伝えていくために

災害の経験が風化するという事は記憶が薄れることですが、なんとか維持継続するために、災害モニュメントや伝承館といったことが建設されます。それらは記念的なものになっているわけで、そこから常に発信することが必要になります。つまり、風化させないためには災害文化を醸成して、定着させていくという視点がないといけません。先人は、それを日常化するための知恵の一つとして祭りのような形で伝承することを試み、それを包み込むような地域文化を作り上げていったのだと思います。風化させないことは後世の人たちに防災の基本形をつないでいくことであり、それを次世代の人が修正しながら忘れずに、日常化するというために意味のあることです。

もちろん、何時起きるのかわからないものに備えることに抵抗がある人もいますし、そのときはそのときと考える人もいます。災害が発生すると実際には日常的にできないことは、すぐにはできないということだけは事実のようです。

この伝えるというのは、事実を言い伝えていくだけではなく、自然災害の特性としてその対象のあり方次第で、さまざまなことが起きることを伝えることです。そして、相手の出方に対応する方法を、継続性のあるやりかたで伝えていく必要があります。つまり、語り部や学芸員だけの話を聞くことだけでなく、聞き手が考え知恵を出すという作為を伴うことが必要となります。

大事なことの基本は、地理教育ではないでしょうか。わが国は災害列島なので、おそらく変わらない宿命で、さまざまな自然現象が起きることがわかっています。確かに、何時起きるかはわかりませんが、必ず起きることを自覚して生活しなければならないということです。

風化させないために何かをする必要があると思います。それには自然の実態について共有し、自然教育をあらゆるところに取り入れ、現状を知ることが大切になります。つまり、物を作るとか保全することに加えて、それを生かすという能動的な活動とそれを意味づけできる知識が必要なのです。風化するという事は、ある程度覚悟すべき経時的なことではありますが、それゆえ、いかに過去を生かして、先に備えるのかが次世代への贈り物にもなるはずで。

災害は、同じように起きることはなく、むしろ多様化したり規模が大きかったりします。そのときに出来る行動は基本形や経験を修正することで可能になるものです。